

五五五

令和二年十一月から綴り始めた「栗野・徒然日記」を、**春(三〜五月)**、**夏(六〜八月)**、**秋(九〜十一月)**、**冬(十二〜二月)**の季節ごとに再編集しました。
栗野の四季折々と日常をつれづれなるままに。

栗野・徒然日記

其の四・秋



それでは一筆!!

2021.9.1 イチモンジセセリ



タマスダレの白い花が咲くころ、姿を見かけるのがイチモンジセセリ。名の由来は、翅の白い点模様が一字に並んでいるからとか。色合いや姿形から、蛾に間違えられることも多いかも。確かに幼虫も蛾の幼虫に似ているし、さなぎは糸で葉を巻き付けて隠れているため(さなぎが藁苞の巢に住むのでツトムシと呼ばれる)、ちょっと蝶の種類とは思えませんね。稲の害虫だそうですが、水田の多い粟野には、なぜか少ないように思います。ただ、大量発生するのは稲が豊作ゆえ、豊年虫とも言われているそうです。子どもの頃は、市街地に住んでいたのですが、庭に良く飛んできていました。幼子でも簡単につまんで捕獲できたので、「〇〇ちゃんでも捕まえられる蝶々」と笑われたのは、私にもイチモンジセセリにも失礼な話。害虫とは言え、何となく憎めない蝶です



◀もう、ススキが鳥羽川堤に見られます。

2021.9.2 季節は、禾乃登 (こくものすなわちみのる)の候

「禾乃登 (こくものすなわちみのる)」候。「禾 (のぎ)」とは、イネ科の植物の穂先の毛のこと。粟野では、ようやく青い穂が出始めたところです。一方、ススキ(芒)が、鳥羽川堤で見られるようになりました。芒という語もまた、禾と同じです。どちらかと言うと、ススキの穂が生える候と言った方がしっくりきますね。昔は茅葺屋根 (かやぶきやね) の材料の一つだったそうですが、ススキと言えば、やはりお月見。今年の中秋の名月は9月21日だそうです。雨模様が数日続くようですが、今年は例年より早く、秋の気配が深まってきそうです。

コロナ禍だけに、風邪にもお気を付けください。ちなみにススキの花言葉は、「生命力」。

2021.9.3 花ごよみ・思い草



道の邊の 尾花が下の思ひ草 今更になぞ物を思はむ…と万葉集に歌われる「思い草」が、ナンバンギセルの花だと指摘したのは、本居宣長だそうです。ススキ(尾花)などイネ科の植物やミョウガなどに寄生する植物。とは言え、ススキの原っぱで今まで一度も野生している姿を見たことはありません。ところがサトウキビ畑に、はびこって全滅させることもあると言います。生育環境次第で旺盛に生育するようです。家庭で栽培する場合は、毎年春先にススキなどの宿主に種を蒔く必要があります。発芽率はかなり悪かったのですが、直接に根に擦り込むようにすると、かなりの株立ちが見られるようになりました。あまり数が多いとススキでも衰弱してきます。

ただ、私の育てている鉢では、確かにススキも弱りますが、ナンバンギセルの方が先に枯れてしまいます。栄養が吸収できないのでしょう。風に飛ばされた種が、ススキなどに巡り合えない場合は、何十年間も休眠する能力を持ち合わせていると言います。花言葉は「思い草」。ススキに身を潜め、ひっそりと物思う…その姿に限れば、まさに秋にふさわしい花です。

2021.9.4 秋刀魚が安い？



▲見上げれば、すっかり秋空が広がっています。



▲竹藪の空高く 日差しはまだまだ強く。

今年もサンマは不漁で、大衆の口には入らない、と言われていましたが、どっこい、先月末には北海道産のサンマが、過去 20 年間で最低だった今年の 10 倍超の水揚げを記録したとか。そのおかげか安価なスーパーでは 2 匹で 298 円、ちょっと値の張る店でも 1 匹で同額程度と、比較的買い求め安い値段で並んでいました。

大正時代、ニシン漁で沸いた北海道。ニシン御殿が建つなど、その隆盛がしのばれますが、畑の肥料にされるほどたほどのニシンは、昭和 30 年代初頭までに漁獲量がめっきり減少。同時期、比較的大衆食材であったお正月の数の子も、黄色いダイヤと言われるほど高価な代物になりました。ニシンが減った要因に、温暖化など海洋環境の変化が大きいとの説があります。ところが去年は、ここ 25 年間で一番の漁獲量を記録したと言います。ウナギの稚魚も、去年は若干回復したと言います。環境の変化もあるのでしょうか、やはりとり過ぎが大きな原因だったのでは？ タラコは、大丈夫かなあ。明太子も、あんなに販売して大丈夫なのかしら。

それはともかく、夕餉のサンマ。大根おろしにスタヂを絞って、いただきます。今年初の秋の味覚。が、ここ数年、脂の乗りが今一で、昔ほど美味しくない。なぜなんだろう？ 太る前にとってしまうから、という説もありますが、結局のところ、品選び、目利きの悪さ…安いものを選んだのが原因か。逆に考えれば、1 匹 100 円前後の価格に戻れば、近海物の痩せていない鮮度の良いンマにお目にかかれるはず。まだまだ喜べない秋の味。クチバシの黄色い、目の澄んだ品を選ぶと良いそうですが…はて？

2021.9.5 花ごよみ・センニンソウ

同じコースでも、日々違う発見があるのが散歩の楽しみの一つ。白く輝く小花が目を引きま。ヒヨドリバナかと思いきや、センニンソウの花でした。葉で分かるように、クレマチスの仲間。果実の綿毛を仙人の髭になぞらえたの



▲遠目ではセンニンソウと見間違ふヒヨドリバナも、団地内の山際に見ることができます。

が、名前の由来とか。雨上がりの朝陽に一層眩しく見えます。空を見上げれば、すっかり秋の雲。栗野台の団地内は散歩にはもってこいなのですが、以前、日記でも取り上げられているように「誰もが散歩を楽しめる地域全体の基盤整備」、とりわけ子どもたちの安全確保は、まちづくりの大きなテーマです。[地域ビジョン](#)のもと、行政機関と共有することが欠かせません。

2021.9.10 花ごよみ・ヌスビトハギ。



▲ダイミョウセセリが秋の日に羽を休めていました。そう言えば、この辺りには食草のヤマノイモが生えています。

▶ダイミョウセセリとは別の蝶が、ヤマノイモに止まっています。早朝なので、まだ翅が開ききっていないようです。



行く手を拒むかのように、ヌスビトハギが咲いていました。実も沢山付けています。名前の由来は泥棒の足跡に似ているとの説が有力ですが、忍び込んだ盗人が庭に生えていたこの草に気づかず、衣服にくっつけたまま歩いていたという説に納得。この実が、散歩中衣服に付くと、さあ大変。とるのに一苦労すること間違いなし(まして犬が迷い込んで土産に付けて来たりしたら、最悪の事態が待ち受けています)。

さて、平成 16 年の[住民アンケート](#)(地域ビジョン第 3 章参照)では、「防犯への不安」が 3 位を占めていました。当時はまだ、家に鍵をかけない家庭も多かったかも知れません。戸締りはしっかりしていた我が家でも、2 度ほど被害を経験。1 度目はもう 30 年以上も前のこと、夜間に室内の中型犬が玄関先で吠えるので、外を見ると、門扉を開けようとしていた若い男性が慌てて逃げていきました。この時は幸い未遂に終わりました。20 年ほど前は真昼間の出来事。これも室内で飼っていた超小型犬が、珍しく玄関先でけたたましく吠えました。普段からボンヤリした犬でしたから、この時は「うるさいよ」と叱りつけていたのですが、バイクが盗難に遭っていました(犬には心の中で謝りました)。犯人はまだ青年で、ほどなく捕まりました。

今年度、地域で取り組みがスタートした「あいさつ」運動。あいさつし合う地域は、防犯効果が高いとのデータもあります。災害時や見守りなど、そのほかにも様々なまちづくりの効果が期待できる「あいさつ」の輪を、みんなで広げたいものです。

2021.9.11 ドングリの青い実、今日?膨らむ

まだ青いドングリを、頭上に見つけました。急に大きくなったわけではないのに、昨日までは気付きませんでした。岐阜特産の富有柿も、青い実が膨らんできていることでしょう。そろそろ、冬物野菜や春の草花の種蒔きする時期になりましたね。

夏場に播種する草花の種類はあまりないのですが(ビオラやプリムラを月に蒔く人もあるでしょうが)、サボテンの種を真夏に蒔いています。我が家で自家受粉させたサボテン(品種名はギムノカリキュウム属の海王丸と言います)は、夏場なら蒔いて1~2日で芽生えます。数年後には、花をつけますが、大きい個体に育つまでには、7~8年かかります。

まちづくりも、種を蒔いて軌道に乗るまで、10年はかかると言います(岐阜駅前の玉宮町もそうでしたが、今は、コロナ禍で苦勞されているでしょうね)。

目標に向かって、できることから着実に…「1人の100歩より、100人の1歩」!!



▶種を蒔いて年目の開花株。自家受粉(サンルームでは、受粉の手伝いが必要)させ、種を蒔きます。

◀一人前にトゲが生え始めたサボテンたち。右の爪楊枝の大きさと比べてください



2021.9.12 鴨、来たる



鶴鴿鳴(セキレイなく)候。今日はやや曇り気味ですが、清々しい空気とともに、澄んだ何種類かの鳥の声が響いています。モズも一羽、高木の上で鳴いています。

と、低い声が聞こえてきます。栗野台の排水池に泳ぐ一羽の鴨です。去年は、暑さが残る10月1日に姿を見かけたので、今年はかなり早い飛来です。一気に秋が深まった感があります。池の周囲が網で囲まれているので、鳥羽川より安全なのかも知れません。

秋が深まるにつれ、仲間が増えて、にぎやかになることでしょうね。

2021.9.13 散歩道



このところ、私の投稿日記は、散歩途上の出来事が多くなりがち。散歩に良い季節ですし、コロナ禍では行動も制限されますしね。

栗野台の団地には、緑が残り、季節感をたっぷり味わえます。昨日の日記で1羽きりだった鴨が、今朝は3羽に増えていました。

そして、木陰にアオバハゴロモ虫を発見。翡翠色の美しさに、しばらく見とれてしまいました。

ただ、団地外の生活道路となると通過交通が激しいため、命の危険と隣り合わせの箇所も見受けられます。特に、子どもたちの安全確保は欠かせません。また、せつかくの鳥羽川の水辺を身近に楽しむこともできないのは残念ですね。

安全で住み良い、都市型居住環境の向上のため、みんなの知恵と行動が、求められています([地域ビジョン](#)参照)。

2021.9.16 花ごよみ・彼岸花



このところ朝晩、急に冷え込んできましたね。昨日は、霧がずいぶん深い朝を迎えました。昨日は気付かなかったのですが、彼岸花が咲いています。秋分の日を驚くほど正確に記憶して開花する彼岸花ですが、ここ2年は、1週間遅れで開花。しかし、突然、草むらに燃え立つかのように、今年は1週間も早く姿を現しました。

子どもの頃、この花にはヘビが寄り付く「へんび花」と教えられました。随分と嫌われていたようで、小学校の3年だったか、遠足で初めて見たとき、その美しさに感動して花を一つ手折り、母への土産に持ち帰ることにしました。担任の先生の「嫌がられるよ」という言葉の意味が理解できませんでしたが、母に得意げに見せると、なるほど、先生が言ったそのままのリアクションが返ってきました。

球根が有毒なのが嫌われる理由かもしれません。曼殊沙華としてお墓の周りに植えられたからかも知れません。その一方、飢饉の時に球根を毒抜きし、非常食として用いたと言います。確かに、畦道にもよく見かけたものでした(ネズミ除けと言う説も)。とすると、いざという時のために、普段は採取されることのないよう、言い伝えられてきたのかもしれない。

今では、品種改良されたものが花壇に植えられ、あるいは道路や河川の修景に活用されるなど、すっかり汚名を返上したようです。鳥羽川堤にも咲き誇る姿を、素直に楽しむことができます。

2021.9.19 山縣市特産の利平栗



▲珍しいヘビウリも。

まだ栗がスーパーに出回っていないので、先日、山県バスターミナルに7月2日にオープンした「[山県バスケット](#)」に行ってきました。入り口付近に、立派な利平栗が山積みされていました。時を同じくして、新聞折込チラシにJAぎふ発行「旬間ミノリーノ」の特集記事に「栗の王様 利平栗」が載っています。これによると、利平栗は栗全体の6%しかない幻の栗と呼ばれ、昭和15年に当時の山県郡大桑村で作りに出された品種とのこと。それだけに結構なお値段ですが、大粒を買い求めました。いつも難儀する皮の剥き方も説明書きが張り出され、また希望者には100円で皮をむいてくれるとのこと。翌日調理するので、自宅で剥くこととしました。説明書通りに剥くと、比較的容易にできました。15分で茹であがった栗は、食べ応えもあり、やめられない、とまらない♪ 5分茹でたものは栗ご飯に。

秋は着実に深まりつつある、と思っていたら、台風が過ぎた今日(太平洋側を通過し、心配したほどの影響はありませんでした)は、猛烈な暑さがぶり返しました。これは体にこたえますが、食欲は秋真っ最中で、全開?!

2021.9.20 松茸

昨日は栗のお話しでしたが、秋の味覚と言えば、松茸ですね。とは言え、もう何年も口にしていませんが。

6月24日の日記に書きましたが、栗野台の開発前の山はアカマツ林で、この時期になると周囲にビニールテープが張られ、入山を禁止していました。

昭和50年代頃でしょうか、三輪の太郎丸にかけての山だったと思いますが、松茸狩りを楽しんだ記憶があります。すぐお隣の山縣市も松茸の産地として有名でした。手入れが行き届いた昔の里山では、松茸は珍しくもなく、「子どもの時分にこれでもかと食卓に上がったので、見るのも嫌」という贅沢な話も聞きます。[国内の生産量](#)は、ピーク時の0.5%とか。昨年、国際自然保護連合は、松茸を絶滅危惧種に初めて指定しました(売買の制限は今のところないようです)。

栗野東に近い旧道沿いのかつての高富町商店街には、直売所が何軒も見受けられたものです。今年も、M松茸店が1軒、店を開いていました。



▲旧道の直売所



▲旧道から移ったのか、通行量の多いバス通りにも直売所ができていました。

2021.9.22 花ごよみ・タラノキ



タラノキと言えば、桜の咲くころ、若芽を天ぷらにして食べる山菜として知られています。9月上旬から、白い花を咲かせています。

今は途絶えてしまった美江寺まつり(3月1日の日記をご覧ください)の縁日に、棘が見事に密集した40cmほどの太い幹が、1本売りに出されていました。その名も、あろうことか「嫁たたき」。たまげました。何に使うのか、疑問はずっと解けませんでした。日記を書きながら、タラノキについて調べてみると、樹皮が民間薬として使われていたようです(だから売られていたのかは定かではありませんが)。

団地の開発前には、種を鳥が運んできたのか、庭にもしょっちゅう芽生えしました。小さいのにタラノキの風貌をしているので、それと分かります。開発された後も親樹が結構見られたのですが、春先に若芽を根こそぎ摘まれたようで、枯れ木が目立つようになり、今ではめっきり少なくなりました。胴芽は摘まないなどの配慮が必要です。

山菜採りのマナーは、タラノキに限らず守りたいものですね。

2021.9.24 野生の鈴虫の声を…



初めて聴きました。自然界で鈴鈴虫の声を聴いた記憶は、私はありませんでした。祖父が毎年、鈴虫を甕の中で「がいわせ」(卵を孵化させ)、お盆のころには透き通った声が室内に響いていたものです。誤って、小さな蟻が一匹でも甕に入ろうものなら、食われてしまう、そんなひ弱な箱入りならぬ、甕入りの虫でした。てっきり、野生の鈴虫など絶滅してしまったのかと思い込んでいました。中秋の名月から3日後、空高く丸い月がまだ残る早朝、バイパスを走る車の音にかき消されながらも、複数の鳴き声が草むらから…ちょっと、感動です。

昨日に続き、昼間は30度以上の暑さが見込まれるものの、朝はめっきり冷え込んできました。

天高く、鱗雲が広がり、竹藪の手前の柿の実が、色づき始めました。

2021.9.25 鳥羽川堤



▲イタドリの白い花が、秋の日差しに清々しい。
川の水も少し住んできたような気がします。

▼鳥羽川堤は、季節の変わり目を感じさせてくれます
(パノラマ撮影)。

朝目覚めると、屋根瓦やベランダを夜露がべっとりと濡らすようになりました。朝日が眩しい鳥羽川堤は、夏の名残か、朝顔やルコウソウが、蔓を伸ばしています。それに混じって、秋分の日が過ぎてまだ咲き誇るヒガンバナとともに、イタドリが花を咲かせています。川の水も、清かに澄み始めた感じがします。

できるだけ車の通らない包みを選んで歩いています。上流部の山県市のような、できれば河川敷内に散歩道が欲しい…。

住宅地に入る頃には汗ばんできました。木陰に入ると、いい香りがかすかに漂います。キンモクセイ(金木星)がもう咲き始めたのかと見上げると、白い小花。よく似ていますが、ギンモクセイ(銀木屋)のようです。いつの間にやら、10月がもう目前に迫っています。



2021.9.26 無人販売所



この夏、屋根付きの小さな無人販売の台が近くに設置されました。農産物が種類だけ、かつ、ほんの少量、数個(又は数袋)だけ並びます。これまでに苦瓜、ピーマン、茄子、じゃがいも、無花果など、旬のものが並びました。いずれも50円で、先日からは栗が並び始めました(一ネット10個弱入っていました)。多少の虫食いや不揃いも、ご愛敬です。一般的に、無人販売と言え、残念なことに金を投じずに持ち去る輩がいることもしばしばいるとか。防犯カメラを仮に設置したとしても、あまり役に立たないようです(採算もとても合いませんが)。日本ならではの良心に委ねられた取引だけに、販売台の上に鏡を置くと、効果があるとも聞きますが…？

継続するには課題もあるでしょうが、無人なのに、なぜか地域とのつながりがそれとなく感じられる販売所を、見守り、育みたいものです。



2021.9.27 花ごよみ・シモバシラ

10年以上も前に、職場の仲間にもらったシモバシラが、庭で咲いています。白い花の穂は確かにシモバシラっぽく見えなくもありませんが、名前の由来は冬になると、枯れた株もとの茎に氷が付着し、霜柱のように見えるからです。

この花は、栗野では見かけません。市内でも、日野の[達目洞](#)(だちぼくぼら)で出会ったことがあるくらい。丈夫な野草なのに、なぜなのでしょう、不思議です。葉が落ち、地上部が枯れても切り取らないように残しておくのが、霜柱を見るコツです。

2021.9.28 羊雲(ひつじぐも)と鰯雲(いわしぐも)

子どもたちの登校する7時半頃(夏休み明け以降は、曜日ごとの半数登校です)、羊雲が爽やかに広がっています。羊の群れのように見えることからそう呼ばれるのですが、よく似ているのが、これより少し小さい鰯雲。羊雲は高度が低い「高積雲」の俗称で、鰯雲などの言わば魚類の名前の雲は、高度が高い「巻積雲」の俗称とのこと(魚類の雲は見かけでイワシ、サバ、うろこ雲と呼ぶみたい)。同じ高積雲(羊雲)でも、今日は少しまばらなものと、もう少し込み合った「密」のものが、同じ空に見られます。

どちらにしても澄み切った秋らしい風景が広がりました。でも、移り変わりやすいのが秋の空…授業が始まる頃には、姿を消していました。



まばらな羊の群れと過密な羊の群れの羊雲が広がっていました。秋空の下、子どもたちが元気に集団登校する姿があります。



2021.10.1 緊急事態宣言が解除



あたかも台風一過のような、雲一つないコバルトブルーの空。最高気温は31度に達しました。

緊急事態宣言が解除されて最初の土曜日。各地で人出が戻りつつあります。とは言え、閉鎖的な空間はまだ及び腰になりがち。ということで、屋外に人気が集まります。

東海三県で最長というすべり台(無・4歳以上)など、ちょっとした遊園地並みに遊具がそろったファミリーパークの子どもゾーンにも、多くの家族連れが訪れていました。有料の乗り物もさることながら、芝すべりなど大人にとっては懐かしい遊びも楽しめます。東海環状自動車道の三輪インターチェンジ近くだけに、県外から訪れる人も多いでしょう。栗野からは車で15分ほど。土日祝日には路線バスも4月から運行されています。土曜日運行のコミバスで路線バスを乗り継ぐのも良いかも。

2021.10.2 人出

新型コロナウイルス感染拡大の第5波に伴う緊急事態宣言が、昨日解除されました。9月29日のNHK番組のクローズアップ現代で、コロナ禍の比較的短期間の社会的孤立であっても、健康面に大きな影響を与えると放送されていました。「外出・ボランティア・サークルなどの外出頻度が減少した人は、要支援・要介護に陥るリスクが2倍、うつや身体機能の低下が1.5倍に高まる」と。社会的孤立を防ぐためにも、地域での双方向の絆づくりを呼び掛けていました。

一方、今朝の岐阜新聞に、コミバス車内に脳トレクイズやフレイルチェックのポスターを貼り出す取り組みが、紹介されています。運行2周年を迎え、地域にすっかり定着した“ぐるっとバス”の運営の参考にもなりそうですね。コミバスを通じた絆づくりや外出・社会参加について、多くのアイデア寄せ合い、コミバスを育てていきたいものです。

今日から10月、お出掛けには良いシーズンです。コミバスを利用して、地域の名所めぐりも良いですね。もちろん、第6波の到来も予測されていますから、引き続き感染予防はくれぐれも怠りなく。



▲ふわふわドーム(無料)では、子どもたちがとても楽しそうに遊んでいました。

2021.10.4 花ごよみ・ホトトギス



散歩中の道端の山林に、ホトトギスの株を見つけたのは9月27日のこと。固い蕾をたくさんつけていました。「一番花」が今日、見られました。園芸品種もいくつか改良され、また野生種が園芸店で売られていることがあります、日本には13種類が自生しているらしいのですが、この辺りではあまり見かけませんから、もしかすると買い求めた株を、近くの方が植えたのかも知りません。

名前の由来は花の斑点模様が鳥のホトトギスのお腹の模様似ているから、と言います。草むらにひっそりと、しかし力強く咲く様子は、日本人好みの風情を漂わせ、格別です。

「永遠にあなたのもの」という花言葉が付けられていますが、どうか持ち去られることなく、みんなで楽しむことができますように。ほかにも併せ持つ花言葉は、「秘めた意志」そして「永遠の若さ」。意味深ではありません。

スズムシが、先日とは違う場所で、かよわな声で鳴いていました。写真は、満開となったのですが、その後、枝の伐採、草刈りによって刈り取られていました。

2021.10.5 秋の七草



◀以前買い求めたフジバカマも、庭で元気に咲いています。

キンモクセイの香りが、まちをやさしく包み始めました。私の散歩コースでは、秋の七草の一つ、ハギが咲き始めています。

七草のうち、この辺りで見られるのは、ススキ、クズ、ハギくらいでしょうか。オミナエシ、フジバカマ、キキョウ、ナデシコは、園芸店で売られていることはあっても、この地域に自生している株は見かけません。フジバカマは丈夫な種類ですが、今や絶滅危惧種とか。一度、長良河畔で見たことがあります。仲間のヒヨドリバナは栗野の山林でも見かけます。クズは空き地や堤防など至る所にて旺盛に葉を茂らせているのですが、花となると大きな葉にも隠れるためか、あまりお目にかかりません。七草の開花期も、万葉の時代の暦で選ばれているだけに、キキョウやナデシコは、とっくに花を終えています。

と言うことで、7月13日の日記で選んだ新・夏の七草に続いて、栗野の新・秋の七草を独断で選んでみましょう。ハギ、ススキ、クズに加え、ヒヨドリバナとセンニンソウ(9月5日の日記)、ヒガンバナ(同、9月6日)そしてホトトギス(同、昨日の日記)。他の候補としてイタドリ(同、9月25日)も良いかも。あなたなら、どんな花を選びますか？

昨日は聞こえたスズムシの声が、今朝は途絶えていました。もの悲しさを感じさせますが、このところ連日、季節外れの30度越えの暑さが続くようです。



◀早朝のノーベル物理学賞を真鍋さん受賞の報。文化の香り漂ようごときキンモクセイも、祝福しているかのよう。

2021.10.6 朝焼け

「朝焼けの日は、雨が降る」と。雲か水蒸気が多いので朝焼けになることが多いのでしょうか。雲はそれほどないのですが、結構、東の空が赤く感じられました。日中、気温はぐんぐん上がり、岐阜県では観測史上、10月としては初の5日連続の真夏日となりました。

ノーベル賞受賞から一夜明けて、地球温暖化に対する警鐘の礎となった功績が評価された研究者・真鍋叔郎さんが記者会見で、国籍を変えた理由を問われ、「それは興味深い質問です」と前置きした後、「日本は調和を重んじる。アメリカでは、やりたいことをやらせてくれる」と答え、「私は協調性がないのです」と締めくくり、笑いをとりました。

他人に迷惑をかけない国民性は大切にしたいものですが、騒音など生活する上で周りに迷惑をかけない最低限の協調性のレベルとは根本的に違い、ミッションを追求する信念、常識にとられない探求心に対する周囲の理解が求められるのでしょうか。ノーベル賞受賞者の人類に貢献する偉大なる功績を生み出した背景に学ぶべきことは多いですね。



▲右端の車体のガラスにも朝焼けが鮮やかに反射しています。

2021.10.11 ヒヨドリ鳴く



早朝から、数羽のヒヨドリが庭にやってきては、大層にぎやかです。9月25日の日記に書いたヒヨドリバナの花の名は、ヒヨドリが鳴く頃に咲くというのが由来と言いますが、今はほとんど咲き終わってしまいました。

冬場にはミカンを二つに切って庭に置いてあげると、何羽ものヒヨドリが交代で食べに来ます(ほぼ独占状態)。雪が積もった冬の晴間には、今日のように盛んに鳴きながら、飛び交っている様子が見られます。

記録的な暑さが続きますが、週末からは冷え込んでくるとの予報。いよいよ秋も深まってきそうです。

2021.10.12 家庭菜園の禁じ手?



発芽には、命の息吹が凝縮されているのを感じますね。特に野菜の種が一斉に生え揃う姿には、感動してしまいます。子どもの頃、「暮らしの手帳」(ちょっと前に放送された朝ドラの「とと姉ちゃん」の舞台となった職場でしたから、若い方でもご存知かも)を、母が愛読していて、毎号、本屋さんの年配の人が風呂敷包みを背負って自宅まで届けてくれました。ある号に、家庭菜園の勧めの記事が特集されていました。スジ蒔きされ、芽生えたばかりの小松菜が生えそろうている写真に、子どもながらにわくわくした思いが、今も心の中に鮮明に残っています。

狭い庭で、大々的な家庭菜園は無理。とは言え、あれも作りたい、これも食べたいと欲望は限りなく。そこで編み出したのが(?)奇策の混合播種。花の種では、黄色の花や白い花だけを一袋にランダムに詰めた品が売られているのを見たことがありますが、さすがに野菜ではないようです。大きく育てる品種はさすがに無理ですが、つまみ菜にする程度なら、この方法でもさして問題を感じません。プランター2個分ほどの幅のエリアに、サラダ用水菜、サラダ用ホウレンソウ、サラダ用春菊、二十日大根、ミニ大根などを適当に蒔きます。ただ、東海地方ならではのモチ菜は大きめに育てたいので、一番北側のエリアにばら蒔き(黒い毛虫が好むため、防虫網をしますが、他のつまみ菜類は被害が意外と少ないようです)。

それにしても、一袋には何百粒もの種が詰められています。つまみ菜にするにしても、我が家ではちょっと多すぎ。これが花の種ともなれば、とても育てられません。花や野菜の種を、愛好者同士でシェアする活動を、公民館のサークルやお茶飲み友達の間で、やってみては?

2021.10.14 刈り田



稲刈りの終わった田が、一面に広がっています。岐阜特産の銘柄米ハツシモは、霜が降りる頃に収穫することから命名されたと言いますが、今は10月中旬が稲刈りの最盛期とか。かつては栽培が難しかったことから、他の銘柄に乗り換えた農家も多かったそうです。

収穫時期が遅いと言え、新潟の博物館で見たジオラマ。深田で育てる背の高い米の収穫には、雪の降る頃まで稲刈りが続いたと言います。胸まで浸かるほど水深があるため、船での作業だったと言います。命を落とすこともあったそうで、米作りの大変さを象徴していますね。新潟は、かつては、日本一、人口が多い時期があったそうで、米作りは一大産業だったことがしのべれます。

昨今、コロナ感染拡大が、コメの消費減少にさらに拍車をかけているようです。



刈り田の野焼きは、今では見かけることも少なくなりました(写真は、常磐地区)。

2021.10.15 キャラクター



ガラス戸にいたので、腹側も撮影できました。



▲市民活動交流センターの“ボラビちゃん”です。

昨夜、久しぶりにヤモリにお目にかかりました。中心市街地のアパートに暮らしていた若い頃、ネオンサインに集まる虫を狙って、窓ガラスにへばりついていました。そう言えば、数年前、市がヤモリの目撃情報を市民に寄せてもらっていましたが、結果はどうだったのでしょうか。

ヤモリを見てぞっとする人も少なくないと思いますが、案外、つぶらな瞳は可愛いですよ。ただ、吸盤のような足は苦手です。江戸川乱歩の小説の挿絵にはもってこいですが、愛されるキャラクターとしては、ハードルは高いかも。その点、鳥羽川に時折見かけるカワセミは、幸せの青い鳥そのもの。ぐるっとバスのマスコットとして、コミバスを彩っています。

ところで、地域のまちづくりを応援する岐阜市の[市民活動交流センター](#)でも、キャラクターが活躍しています。平成16年に発行されたパンフレット「みんなのために あなたのために」で初登場したウサギのキャラクター。名前は“ボラビちゃん”。耳が、ボランティアのVになったラビットです。地域のまちづくりも、それにあやかり、ホップ、ステップ、ジャンプ…!!

2021.10.16 木の実



▲8月29日の日記に登場したクサギ。意外な美しさ。



▲ガマズミ



▲9月22日の日記に登場したタラノキの実。



▲ウメドキ

昨日の天気予報では、一日曇天のはずが、朝から雲一つない秋空。次第に雲が出始めたけれど、強い日差しが降り注いでいます。なのに、テレビのデータ放送では、現在曇りの表示(不可解?)。放送されている天気予報の番組では、現在は曇りの日本地図なのに、同じチャンネルのデータ放送では晴天(不可解?)。このところの寒暖の差の激しい天候のせいかな、体調は今一つ。散歩に出かけようか、距離を縮めようか、朝起きて迷っていたけれど、秋空に誘われて、いつも通り散歩ができました。

街路樹や山際の木々の実を探ししながら、いつものルートを回り切りました。ありがたやありがたや。発見した木々の実の写真で、栗野の秋をお伝えします。



秋を代表する木の実と言えば、なんといっても柿でしょうか。長良川以北の柿の産地では、早くも富有柿が、無人販売所に並び始めました。昨日買ったのは、9cmほどの大きなサイズながら、色も器量も今一つでした(値段が値段です、出荷できないものが並べられるのですから納得して買い求めます)。あまり期待していなかったのですが、なんと、食べてみたらメチャクチャ甘かった。何やら儲かった気分です。

2021.10.16 草の実 ひつつき虫



目立たないけれど、野草もしっかり実を付けています。「ひつつき虫」は、衣服にくっつく実を総称して言います。子どもの頃、投げ合ってくっつけあった記憶がよみがえります。

その代表格が、オナモミです。しかし、今見掛ける種類は外来種のオオオナモミ。西日本ではオナモミは、1960年代にはほぼ絶滅してしまったらしいのです。第1回東京オリンピック(1964年)が開催された当時、長良河畔や堤には、間違いなく2種類のオナモミが生えていて、夏休みに採集した標本を提出した記憶があります。ちょっと小粒だった種類を、「メナモミ」だと思い込んでいましたが、今回、日記を書きながら調べてみると、メナモミは全く異なる種類でした。となると2種類の「オナモミ」だったのかも。小学生のころ愛用し、落書きだらけでボロボロになった「牧野日本植物図鑑」(昭和24年初版、手元にあるのは昭和8年発行の6版)には、在来種のオナモミの絵が掲載されています。北米原産のオオオナモミが日本に入ってきたのは1929年と言います。子どもの頃はまだ、混在していた可能性がありますが、主に遊んだ実は、大粒の実でした(多分外来種)。

同じく外来種のアメリカセンダングサも普通に見られます。9月10日に書いたヌスビトハギも、ひつつき虫の仲間。

木の実に比べ、気づかれにくい?地味なものが多いですね。



▲古い植物図鑑のオナモミ



▲アメリカセンダングサ



▲イノコズチ

2021.10.17 菊花開(きくのはなひらく)



※文化祭は中止となりましたが、11月初旬、大輪の菊の鉢が、公民館の外構に見事に勢ぞろいしていました。野菊の味わいとはまた違った秋を楽しみました。出品者の皆さん、ありがとうございました。

1年を72の季節に分けた72候は、「菊花開」候となりました。道端には野菊が可憐な姿を見せています。いわゆる野菊と呼ばれる花は、主に秋に咲く野生の菊の種類ですが、地方によって種類は様々なようです。もっとも、野菊はブルーか白系の花が、秋の露に似合う気がします。

栗野で見かけるのは、その代表的な種類であるノコンギクと思われます。

さて、コロナはひとまず沈静化しつつあり、空の便の予約が一気に増加しているようです。一方で、第6波が懸念されています。地域の文化祭も昨年に続き中止になりました。サークル活動や地域の活動が再び軌道に乗るには、時間とエネルギーが必要かも知れません。くじけず頑張りましょう。

今シーズン初の本格的な冷気が流れ込むとか。暑さがようやく収まり、一気に秋が深まりそう。体調管理に気を付けましょう。

2021,10,18 放射冷却…深まる里の秋



放射冷却のせいもあり、今朝の最低気温は11度(日の出の写真は6時9分撮影)。つい先日までの暑さが嘘のようで、陽だまりが恋しいほど。里の風景も、確実に秋が深まりつつあります。



▲休耕田のイヌタデの花色が、濃さを増してきました。

▶ここにもタデの仲間のミソソバが、一面満開です。



2021.10.20 初時雨 二重の虹



早朝、初時雨が、栗野のまちに二重の虹(ダブルレインボー)を架けました(写真は6時31分撮影)。条件に合わないとお目にかかれない、とても珍しい現象のようです。さらにダブルレインボーには、幸運が訪れるとの言い伝えがあるようです。

今日は、木枯らしが吹くとの予報もあります。まずは風邪などひかず、健康でありますように。



▲栗野台と山縣市方面を望む。左サイドのうっすらと二重にかかる虹…分かりますか?(6時32分)



▲ダブルレインボーは、6時28分から6時33分まで一瞬の出現。6時36分撮影時は、もう一重。



▲北の山並みに初時雨を連れてきた雲は、まるで雪雲のよう(6時21分撮影)



▲眉山と栗野西方面を望む上空に架かる虹は一重に戻っていましたが、何となく幸せな気分です(6時38分)

2021.10.21 蟋蟀在戸(きりぎりすとにあり)



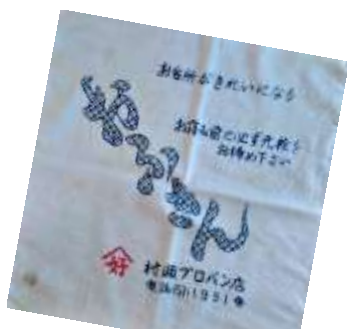
この秋一番の冷え込みとなりました。市気象台の観測で10.2度と言いますから、粟野はもっと下がったに違いありません。手のひらがかじかむような感じ。少し前までは、散歩で汗ばむほどでしたが、1週間もしないうちにこの冷え込みとは。

暦の72候では、蟋蟀在戸(きりぎりすとにあり)の季節。キリギリスとはコオロギのこと。寒くなるとコオロギも家の中に忍び込む、と言う意味のようです。

最近まで弱々しいながらも草陰で鳴いていたのに、今日は聞こえてきません。確かに、子どもの頃の気密性のない家屋には、木戸の下から家の中に入り込んで来ては、声高に鳴いていたことを思い出します。

散歩を習慣にしてから、まず最初に空を見上げる習慣が身に付きました。毎日違った顔を見せてくれます。ただ、曇天の日は、面白くありません。気分も沈み込みます。日本海側はこれから雪や曇りの日が続くことでしょう。憂鬱な気分を吹き飛ばす意味からも、そんな日こそストレス解消や外出で気分転換を図りたいものですね。今日は、サバの模様をした鯖雲が見られました(6時54分)。この雲が発生すると、特に幅が狭いほど、近々雨が降ると言われています。天気予報はおおむね晴れの日が続くようですが、さて…。

2021.10.24 布巾のお話



お得意様に配られたらようですが、お店は今も現存していないようです。



▲今も、さまざまな素材のフキンが売られていました。

その昔、商店の名前を染め抜いて、お得意様に配られていた布巾(ふきん)。今でも粗品と印刷したのし付きで配られることもあります。厚手のタオル的なものが多いようです(とはいえ、それも最近あまり見かけませんが)。使い始めは食器の拭き取りに、柔らかくなったら台布巾に、くたくたになったら雑巾にと、気の毒なほど使い回されるだけでなく、ご飯の湯気取りやお膳や茶道具などに掛けたりと多用途に使われてきました。江戸時代には、針仕事の手習いに模様を描いたり、嫁入り道具の一つとされたようです。今では、油污れのふき取りや揚げ物の油とりにはキッチンペーパーを、と使い分ける家庭も多いのでは?とはいえ、布巾は常に清潔に保つ一手間が欠かせないため、不織布などの使い捨て布巾が、伸びてきているようです。布製にも、綿のほか麻の布巾などの天然素材のほか、抗菌処理を施したり(天然の柿渋を使用したものもあります)、マイクロファイバーなど特殊素材を使ったものもあります。ちなみに食器は自然乾燥し、拭かない国もあるそうですし、わが国でも少なくないかもしれません。自動洗浄機や食器乾燥機を使っている家庭もあると思います。ただ、テーブル拭きには、台布巾を使う家庭が8割を占めるとのアンケート結果があります。

お値打ち感(コスバ)も鍵となりますが、歴史ある、そして豊かな生活文化の一つとして、布巾を今後も残したい気がします。

2021.10.25 花ごよみ・アワコガネギク



今日は、まとまった雨になりそうですね。10月17日に野菊のことを書きましたが、一昨日頃から、アワコガネギクがその名前のように泡のようにまとまって咲き始めました。野菊の中では珍しく黄色の目立つ花で、遅い時期まで咲いてくれます。在来種は準絶滅危惧種に指定されていますが、崖や道路などの工事の法面緑化の際に、中国産のヨモギなどの種と共に使われたため、県内の国道端などでも群落をつくって咲く光景が見られます。

さて、メダカは地域ごとに異なる遺伝子の多様性が確認され、他の地域のメダカや飼育している観賞用メダカの放流が問題となって随分経ちます。

同様にアワコガネギクも外見上見分けがつかなくても、外来種との遺伝子かく乱(交雑)の問題が指摘されています。とは言え、花には責任がありません。ハーブ園にも植えられるほど香りも持ち合わせるアワコガネギクのゲノムが解読されたのは最近の2019年のことで、園芸用の品種改良への応用が期待されているらしい。あわせて、在来種の保護育成にも努めたいものです。

2021.10.29 見上げれば雲一つなく、川面にはカワセミの飛翔

昨日、今日と、雲一つない秋空が広がっています。橋桁から鳥羽川を見下ろした一瞬、カワセミが川面をよぎりました。久しぶりに出会いましたが、秋空をより凝縮して映し出すような翡翠色の宝石。川底の石の苔を食む魚があちらこちらで、腹を光らせ瞬いています。秋の陽もまだ栗野の空高くに輝いています。



▲国道256号から栗野東方面 (12時32分撮影)



▲国道256号から栗野西～左に眉山、鳥羽川の流れ～(12時25分撮影)

2021.10.30 続・木の実、草の実



気温が高い日が続き、あちらでもこちらでも、金木犀が二度咲きしています。

昨年アジアの平均気温は、観測史上最高を記録し、温暖化にますます拍車がかかっています。花の良い香りを二度楽しめるのは大歓迎なのですが。

一方で、秋は確実に深まり、さまざまな木の実、草の実が色付いています(10月16日の日記の続編になります)。写真は、柿の実に見えますが、実はカラスウリ。今にも弾けんばかりに赤く熟しています。

生け垣に植えられた茶の木は、昨年花の実を残しながら、白い花をうつむき加減に咲かせています。

これからの季節、紅葉から落葉する里山には、実と花が入り混じり、多様なパノラマ世界を醸し出します。とても楽しみ。



▲茶の木には、実も残っています。



▲サルトリイバラの実は、まだ色づき始めたばかり。



▲枝に残る柿の実はほとんどが割れた崩果ですが、丸い実もわずかに残っています。



▲山際に枝垂れていたコムラサキシキブ。実を鳥が運んで庭に生えることも

2021.10.31 「生涯学習」 事始め①



▲まだまだ自己満足の域ですが、社会とのつながりを求めて投稿してみました。

昔は生涯学習と言うと、趣味や習い事のイメージがありました。今は、「学んだことを社会や地域のまちづくりに生かすこと」に主眼が移ってきた感があります。とは言え、料理にしても趣味や特技にしても、自分なりに工夫を重ねたり、新たな挑戦をすることが健康寿命の延伸や生きがいにつながるわけですから、基本的な意義は変わらないでしょう。もともと、生涯学習と意識して何かを始める人は少ないかも。私も、これと言って思い当たりません。サボテンを種子から育てているのは、9月11日の日記に書きましたが、NHK「趣味の園芸」に投稿したところ、31日の放送で採用してくださいました(何ももらえません)。コロナ禍で巣籠もり状態が日常的になっていた中、趣味を通じて、少し社会と繋がりを持つことができた気がします。これって、生涯学習の弟一歩になりそうかな？仕様外学習初心者の経験談を、私なりに書いていけると良いのですが…、さて？

2021.11.3 「生涯学習」 事始め②～もらわれて行きました～



▲径30cm超えの親株は、我が家に残りました。

先回の「趣味の園芸」でも、人気沸騰中の多肉植物。その名のとおり葉や茎などに水を蓄えるため肉質な特徴がありますが、仲間であるサボテンと区別して呼ばれることが多いようです。なじみの深い種類では、「医者いらず(アロエ)」がよく知られていますね。

多肉植物は、何千もの種類があるので、難しいものと簡単に育つものが混在しています。アロエより簡単に育つ種類も多いのですが、中でもアガベ属は放任栽培で育ってくれるものが多いようです。我が家でも、仕事にかまけて多くのサボテンが枯れてしまった中、アガベ属の品種「王妃吉祥冠」は増え、大きく育ち、手に余っていたところを、ご近所の多肉植物愛好家の方に引き取っていただくことができました。葉の先端に鋭いトゲがあるので、人におわけするのも気がかりで、とは言え処分するのも可愛そうで困っていたところでした。雪が葉の上に積もっても、陽当たりが悪くても、水が切れても、文句も言わず丈夫に育つ孝行な子でした(庭が広ければ、地植えで砂漠のジオラマに最適な品種だと思います)。

どんな趣味にも共通することですが、趣味が取り持つ縁は、生涯学習の取り持つ縁と言えるかもしれません。親株だけ一鉢残して送り出した日・・・文化の日、先勝の秋晴れの朝でした。

2021.11.6 「生涯学習」事始め③～シルバー人材センター～



▶設立四十周年を記念する公募のシンボルマークとキャッチフレーズ「生涯現役＝健康・生きがい・社会貢献」の発表。



今から半世紀前にも満たない頃、働きたくても退職者が再就職することは困難な時代。ご隠居さんが働くこと自体、とかくタブー視されていたかもしれません。そんな中、立ち上がったのは高齢者自身でした。中核を担ったのがシルバー人材センター。自ら働く場所を確保し、実際に働く、まさに自主自立の精神を掲げた組織として全国各地に設立されました。その後、雇用延長など、高齢者を取り巻く環境は大きく変化しましたが、センター運営の理念「高齢者の自主自立」は今も変わりません。

(公財)岐阜市シルバー人材センターが、今年設立40周年を迎え、今日、メディアコスモスで記念イベント「シニアワークフェア」が開催されました。手作り販売やクラフト講座、講演会などを楽しませていただきました。

センター設立当初に28人の会員数は、今では2,000人規模となり、全国でも最高齢101歳の会員を含め、各自が自主自立の精神でさまざまな分野で活躍されています。そんな就労、社会参加、交流、学習やクラブサークル活動の機会を通じて、生きがいを得られるシルバー会員は、健康リスクが低減するとのデータもあります。入会説明会が、随時開催されています。

2021.11.7 「生涯学習」事始め④～投稿～

猛威を振るったコロナのせいで、サークル活動や公民館講座などが制限され、ともすると社会的孤立が懸念される事態に。ここは、巣ごもりでも社会とつながりを実感できる昔ながらの「投稿」という術を駆使したいもの。ハガキもお手軽(郵便料金の値上がりが繰り返され、追加の切手が必要になるのが厄介。ちなみに、1円切手が不足気味との情報も)。

信頼できる投稿先であればインターネットで。写真もデータで送れるので便利と言えば便利。10月20日の日記に書いた「二重の虹」の写真を、岐阜新聞の「読者のひろば」に送信したら、掲載されました。趣味を通して、社会的なつながりが少し実感できたような気分。趣味に合った雑誌には多分、投稿欄が…。

▶日曜日に掲載される岐阜新聞「読者のひろば」。このほか、隔週月曜日の「岐阜文芸」(短歌・俳句・川柳)も読者の投稿欄です。



2021.11.8 黄葉するヤマノイモ健康



ヤマノイモの黄葉が始まっています。長いイモが地中に伸びているはずですが。掘り出すのはかなりの重労働。昔は、掘った跡が至る所に見られたものですが。山は、これから色付き始める樹木もあれば、ほとんど落葉してしまったものもあります。すぐ近くに開設されている無人販売所に、サツマイモが50円で販売されていました。寒さに負けないよう、滋養に満ちた旬の食べ物を、手軽に味わわせていただきます(冬眠…??)。

▼地域の無人販売所に50円でサツマイモ登場。旬のものを安価に分けていただき、ありがとうございます。栗野にも秋が深まっています。



2021.11.9 長良川の瀬張り網漁



金華山の麓、鶉飼(5月11日～10月15日)の地点から少し下った金華橋の下流で、鮎漁の一つ「瀬張り網漁」が行われていました。昼下がりでは、網を打つ姿はまだ見られませんが、川幅いっぱい仕掛けられた風景は、鶉飼の後の風物詩です。昭和60年頃、武儀川の千疋橋の辺りで、カーバイトの炎に集まる鮎を一網打尽(おそらく「夜網漁」)にし、獲れたての鮎を塩焼きにして、腹一杯いただいた記憶がよみがえります。

子どもの頃にさかのぼりますが、8月上旬の長良川花火大会のまさに翌日、急に川の水温が下がったのに驚いたことがあります。旧盆過ぎには、産卵のため川を下ってくる落ち鮎、子持ち鮎の季節だったと思います。今よりずっと早かったのではないのでしょうか(水温は当時と比較して、間違いなく上昇しています)。雄の腹にある白子に対して、雌が腹に抱えた卵を泡子と呼び、その食感子どもながらに楽しかったのですが、母や祖母は「もう落ち鮎やで…」と、どこか落ち込んだような雰囲気漂わせたものです。その理由は今となっては不明ですが、去りゆく夏を惜しむというよりは、子持ち鮎の値が高くなることへの抵抗感があったのではあるまいか、と日記を綴りながら、ふと思いついたのです。

▶今年完成したばかりの岐阜市役所が見えます(右端)。市の中心部を貫流する地点に、鮎の産卵場所があるなんて、すごいですね。



◀お腹がはち切れそうな養殖の子持ち鮎。昔は「子持ち鮎だから天然だよ」と言われたものですが、最近の養殖技術はすごい。

2021.11.10 山茶始開(つばきはじめてひらく)



▲掃き集められた落ち葉の中には、ドングリやそのハカマも混じていました。

今朝は、吐く息が朝陽に白く、手が少しばかりかじかみました。1年を分けた72候では「山茶始開(つばきはじめてひらく)」時期。山茶はツバキ科を指します。ツバキはまだまだ先ですが、サザンカはもう咲き始めています。花ごとポトリと落ちるツバキと違い、ひとひらずつ花弁が散るサザンカ。ですが、京都にある椿寺(※)のツバキは散り椿と呼ばれ、確か2本の老木が、白砂に赤い花弁を散らせていた記憶があります。

「さざんか さざんか さいたまち」…童謡の「たきび」を思い浮かべる人も多いと思いますが、続く歌詞の「おちばたき」は、すっかり歌の中だけの世界になってしまいましたね。無人販売所に並んでいたサツマイモを放り込んでみたいと思うのは、私だけでしょうか。そう言えば、やはり歌詞にある「しもやけおてて」も、あかぎれ同様、今は昔…。

※京都の地蔵院(椿寺) 五色八重散椿

北区地蔵院(椿寺)にある豊臣秀吉遺愛の散椿。小野蘭山著「本草綱目啓蒙」(享和3年=1803年)に、京都紙屋川地蔵院のチリツバキとして記載された名木。正岡子規が「椿寺の椿の花は散りてこそ」とよんでいる。また、速水御舟がこの椿をテーマに屏風絵「名樹散椿」を描いている。当時の木は枯れ、現在は樹齢約100年の二世が咲く。市指定天然記念物。見頃は3月下旬~4月中旬。【京都市観光協会ホームページ】

2021.11.11 和の色・花薄(はなすすき)



9月の2日の日記に今季初登場のススキ。随分と長い期間にわたり見かけますね。同じススキでも、赤っぽく見えたり、金色に輝いたり、最後は銀髪のように風になびいたり、まるで種類が違うように見えることがありませんか。同じ場所に生えていても、穂の出る時期や色が異なるのも何とも不思議でなりません。

公家社会の着物のかさねの色目に「花薄」があります。表地は白で花をつけたススキの穂、裏地は縹(はなだ)色で葉を模した色目のことだそうです。かさねの色目は、薄い生地のため透けて独特の色合いを醸し出した微妙な花色となり、わが国古来の色合いと言えますね。ちなみに縹色(はなだいろ)は明るくうすい青紫色。かさね合わせた花薄の色目は、初秋の色のようにですが、季節ごとの微妙な花色の変化を人々は楽しんできたのですね。

伝統的な和の色は、柿渋色をはじめ季節や自然界にちなんだものも多く、500種類近くあるようです。そう言えば、[アダプトプログラム](#)を実施しているエリアに設置されるサインボードの色彩も、和の色彩で当初はデザインされていたとか。

四季折々を色彩に映し、楽しむ心と美的感覚を大切にする習慣が広がれば、ポイ捨ても減るのでは？



▲金色に輝く個体。



▲天高くなびく穂、風は止まず。終わりがけのススキが、秋の陽に輝く風景には目を見張ります。



▲金色と赤色の穂が一緒に生えています。



▲終わりがけの白い穂を接写。



▲赤っぽい時期の穂を接写。

2021.11.11 ススキの意地



ブラックバスやオナモミ(10月16日の日記)の例のごとく、生物の世界では、外来種が在来種を駆逐する傾向があります。1970年前後、外来種のセイタカアワダチソウが旺盛にテリトリーを広げ始めた頃、「ススキが駆逐されてしまう」との危惧が声高に叫ばれていたことを記憶しています。しかし、意外にも今では、それぞれ棲み分けがなされています。その理由として、朝日百科「植物の世界」1996.7.21(発行)には、「セイタカアワダチソウが他の植物の成長を妨害する成分を分泌するものの、自身の種や根の成長も阻害する」との説と、「細長いススキの葉は、セイタカアワダチソウと比べて他の植物による光遮蔽を受けにくい」とする説の両方が紹介されています。いずれにしても、古からの日本の生活に深く溶け込み、原風景を守ってくれたススキを愛でてあげたいですね。

写真は、常磐地区の休耕田の風景。手前にセイタカアワダチソウの黄色の花が目立ちます。ススキの群落の向こうには、刈り取った後の稲藁が積んであります。「藁にお」、「わらぼっち」、「稲むら」、「稲わら」など、各地や家ごとに呼び方や積み方が異なるようです。辞書では「稲塚」とも。この辺りでは何と呼んでいるのでしょうか？

2021.11.13 白いキノコと、白い蛾と・・・



雪の便りが各地から届くようになりました。早朝は栗野も、寒さが増してきましたが、昼間は小春日和どころか汗ばむほどの陽気です。雪はまだまだ先になるでしょうが、白いものをいくつか見つけました。伐採されて数年経つ団地のケヤキの切り株が、何本も並んでいます。隣り合わせにもかかわらず、それぞれ異なるキノコが生えています。その中に、白いキノコがありました。我が国は世界有数のキノコ王国だそうで、確認されているキノコだけで2500～3000種類あり、実際には10,000種類ものキノコが存在するとも言われます。調べてみても名前が分かりません。

一方、蛾は我が国に4500種類いると言われます。白いキノコに張り合うかのように、白い蛾が木の葉に止まっていました。調べてみたところ多分、シロツバメエダシャクかと思われます。

蛾と言うと、嫌う人も多いと思いますが、夜、森の中で、灯りをともして蛾を誘うと、さまざまな色の蛾が集まり、最初は怖がっていた子どもばかりか大人も夢中になるという話は分かる気がします。

四季折々、キノコも蛾も、図鑑を見るだけでは分からない種類と魅力が満ちています。目を向ければ、フィールドワークでしか味わえない世界が栗野にはまだ残されています。



▲白い蛾は神秘的な生き物と言うけれど、どうやら毒蛾らしい。



▲蝶のように見えますが、気温が低いと蛾もこんな翅の閉じ方をすると？

▲腰掛状の、違う種類のキノコが生えていました。城っぽいもの、黒っぽいもの、やや灰色っぽいもの・・・隣り合わせの伐採された木に生えていました。

2021.11.14 狂い咲きと、旬の花と・・・



▲バイパスの高架下に見つけたビワの花。上から見ないと気付かないかも。

▶渥美清を花に例えると?・・・ヤツデの花は、まだ少し硬め。



岩野田中学校の近くの山際に、ツツジの花が咲いていました。しばらく続いた陽気のせいで、季節を間違えたようです。このところの冷え込みで震えているようにも見えます。

この秋、キンモクセイが二度咲きしたことはまだ記憶に新しいですね。この場合は短かい期間に返り咲きしたわけですが、今回は、春と秋を間違えたわけです。時期を間違えて咲くことを一括りにして、返り咲きとか狂い咲きと表現するようですが、本来開花する時期に二度咲くケースは「二度咲き」、そうでない場合は「狂い咲き(耳障りは悪い?)」などと区別した方が、しっくりくる気がします。また、二度咲き、三度咲きを「返り花」と言えば、ちょっとしゃれた感じになります。

晩秋から初冬にかけての木立の花も咲き始めました。11月10日の日記のサザンカのほか、注意深く見ないと見過ごしてしまいそうですが、ビワやヤツデがひっそりと咲いています。冬の足音が近くに聞こえてきます。



。

先日、岐阜市シルバー人材センター主催の講演会を聞きに行きました。知識を学ぶ機会を利用することは、生涯学習をやったという気分にはなりますね。テーマは、「岐阜弁」。講師は神田卓朗さん(元岐阜女子大教授)。岐阜生まれの私は、ほぼほぼ、講話に出てくる岐阜弁は分かりましたが、最近使っていないなあ、と懐かしさがこみ上げてきました。ただ、「たいだい(てーでー)」と「じょうらかす」は、知りませんでした。意味、分かりますか？

「えっ、これって岐阜弁だったの」と今回初めて知ったのは、「かしわ」・・・鶏肉のことです。「鶏肉買って来るわ」とは言いません。「かしわ買って来るわ」が日常会話ですから。

そう言えば、関西の友達と、方言が原因で喧嘩になりかけたことを思い出しました。「この品、かってきた」と友達が言います。「いくらしたの?」と私。「かってきたんや。何で、金払わなあかんねん」と彼。「だから、いくらやったんや」と私。その後数回のやり取りがあって、険悪な雰囲気になりました。分かりますか?「かってきた」は「借りてきた」こと、買うことは「こうてきた」と言うのだそうです。

コミュニケーションが取れないということは、争いにつながることを実感しました。最初から分からない外国語なら最初から諦めますが、通じていると思いついでいる日本語ではショックが大きい。

そう言えば、メールのやり取りも、会話と違い、真意が伝わりにくいのも問題ですね。

別の日、公民館で、「きーない」という、きれいな岐阜弁を同年代の人が、さりげなく発せられたのを聞いたとき、ハッとしました。そう言えば、全く使っていないなあ(黄色のことです)。

2021.11.20 雪虫

今日、栗野にも雪虫が舞い始めました。冷え込んだ日より、ちょっと温みが残る夕凧の頃に、低く飛んでいました。いよいよ、冬将軍の到来間近です。気温の変化に体調を崩されないよう、皆様お気を付けください。写真は、スマホに百均で購入したマイクロレンズを装着して撮影した雪虫。



2021.11.28 徒然日記の掲載を開始して早や1年



日記がスタートして、早いものでもう1年が経ちました。最近、書き込みに不具合が生じるようになり、しばらく休載させていただいていました。

今朝の厳しい冷え込みに、栗野にも今季初の霜が降りました。野原一面が朝陽にキラキラ輝いていました。

真っ白な新しい気持ちで、まちの変遷や自然など、今後も栗野の記録を綴っていきたく思います。今後ともよろしくお願ひ申し上げます。